

5) CF で発見された終末回腸原発悪性リンパ腫の1例

鹿嶋 雄治・佐藤練一郎 (秋田組合総合病院 外科)
 香山 誠司・宮崎 賢一 (秋田組合総合病院 師岡長)
 佐伯 重昭・福田 二代 (秋田組合総合病院 内科)

胃を除く消化管原発の悪性リンパ腫は、腸重積症やイレウスなどの腹部症状を伴い、無症状で発見されることは希であるが、我々は無症状ながら偶然行った大腸ファイバーにて終末回腸原発の悪性リンパ腫を診断、治療したので報告する。症例は79才の男性で3年前に直腸潰瘍の既往があり、follow up CFを行ったところ Bauhin 弁から 3cm の回腸に隆起性病変を認め、同部よりの biopsy で Diffuse lymphoma, large cell type の悪性リンパ腫と診断した。その後の精査にて臨床病期は Stage 4 であったが右半結腸切除術を施行した。術後 VEPA 療法を行い、16カ月間完全寛解の状態にある。

6) 低異型度進行大腸癌の臨床病理学的特徴

片桐 耕吾・渡辺 英伸 (新潟大学第一)
 味噌 洋一・本間 照 (病理学教室)

大腸腺癌は構造異型から高分化型、中分化型、低分化型に分類されるが、当教室では細胞異型に注目し、大腸腺癌を高異型度と低異型度とに分けることを提唱してきた。今回、外科的切除された高分化低異型度進行癌10病変 (pm 癌3例, ss 癌7例), 高分化高異型度進行癌30病変 (pm 癌9例, ss 癌21例) を用いて高・低異型度癌の生物学的態度、肉眼形態の特徴を比較検討した。低異型度癌は高異型度癌に比べ静脈侵襲能 (0%/40%), リンパ節転移能 (12.5%/28.6%) が低く、細胞異型度は癌の生物学的態度を反映すると推定された。また低異型度癌は高異型度癌に比べ隆起型 (70%/27%), 粘膜模様類似の表面性状 (60%/13%) を呈する傾向にあった。

7) 新潟県内大腸癌調査報告

島田 寛治 (県立柿崎病院 外科)
 筒井 光広 (県立がんセンター 外科)

1987, 1988 年に引き続き 1989 年の新潟県内の大腸癌症例の調査を行い、1,365 例を登録した。

手術例は 1,235 例、内視鏡的摘除のみの例は 130 例であった。男性対女性は 727 : 638 例、単発結腸癌は 771

例、直腸癌は 558 例であった。今回の調査では結腸癌も (男 403 : 女 368), 直腸癌も男性が多かった (男 301 : 女 257)。右側結腸癌 (C, A, T) の症例は女性が多く (男 174 : 女 209), 左側結腸癌 (D, S) は男性が多かった (男 173 : 女 129)。右半と左半では前回と同様右半が多く (右. 383 : 左. 302), 直腸は 43% にとどまった。

人口 10 万人対の粗罹患率は 25.4 ~ 85.2, 平均 55.1 (1989), 男 60.4, 女 50.0 であった。前年に比し、5 ポイント上昇した。年齢訂正頻度では新潟市が有意に高く、糸魚川圏が有意に低かった。他府県との比較も行い、新潟県の罹患率の高いことを強調した。

尚、本研究は新潟県病院局の特殊学術研究費によってなされた。

主題「潰瘍性大腸炎の外科治療」

1) 当科における潰瘍性大腸炎の外科治療

名村 理・八木 伸夫
 岡村 直孝・若桑 隆二 (長岡赤十字病院)
 田島 健三・和田 寛治 (外科)

当科では、過去12年間に2例の潰瘍性大腸炎症例に対し3期分割手術によるW型回腸囊肛門吻合術を行ない良好な結果を治めた。1例は、慢性持続例、他の1例は巨大結腸症の症例であった。第1期周手術の白血球数、 α_2 -gl, γ -gl, CRP に注目してみると術前の保存的療法によって手術時には、両症例で低下しており血液学的には、炎症の消退期にあったと考えられた。このことから、保存的療法で炎症を可及的に鎮静化し、時期を逸せず分割手術を行うことにより潰瘍性大腸炎の外科的治療が、良好な結果をもたらすと思われた。

また、両症例とも第3期手術終了後の排便機能は良好で、日常生活に及ぼす障害も認められず、高い quality of life が得られた。以上よりW型回腸囊肛門吻合術は、潰瘍性大腸炎の外科治療において quality of life の点からも優れた術式であると思われた。

2) 潰瘍性大腸炎に対するW型回腸囊肛門吻合術 (シネ)

島山 勝義・島村 公年
 酒井 靖夫・須田 武保
 武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

潰瘍性大腸炎に対する結腸全摘術、直腸粘膜切除術、回腸囊肛門吻合術は炎症の再燃や悪性化の危険性のある